

「夢育」：一人ひとりの子どもが、自分の中で「夢」を育みながら、それに挑戦していく経験を通して、「意欲」や「自信」などの「自分を高める力」を養っていく教育（岡山県教育委員会）

安全安心な人間関係で築かれた家庭は、子どもたちにとって「心の安全基地」となり、非認知能力、夢育のベースにもなります。これを夢育の視点で表現するなら「夢育基地」でしょうか。「わが家のすこやか日記」は、まさに「夢育基地」のエピソード集として親しまれていますが、一方で「そんな余裕はない」「現実ほど遠い」という声も聞こえてきます。そこで、皆さんの「夢育基地」の実現に向けて、少しでもお役に立てればと思い、日記から見える夢育ポイントを紹介します。



夢育アドバイザー（岡山県）中山芳一



作品

中学生部門

母がおくられて帰って来た日のことです。私と父は母の帰りを待っていました。突然、父が「何か、作ってみよう」と言い始めました。「へー、今までの料理はほとんど母に任せていた私はほう然としてました。でも、いつも母に任せているのは悪いと思う、みそ汁を作ることになりました。一人だと、少しあわてましたが、何とかみそ汁らしい物を作りました。味見してみると、驚きました。味がすいのです。母と父に出すのが急に恥ず

かしくなりました。でも、帰って来た母と、父は一口飲んでええくらい美味しいじゃん」と言ってくれました。それに、嫌な顔いっさいせず、完食してくれました。「随分やる。」「私が言ってもいや、これがええんじや。」「また、作ってな」と言ってくれました。とても心が温かくなりました。だから、その日作ってくれた母の美味しい料理は決して残さず、笑顔で完食しました。これからもうすいていきたいと、心から思いました。

優しい嘘を

マンガ/山崎晋

注目!

夢育ポイント

このエピソードで主人公は、おいしいと言って食べてくれた親の姿を見て、料理を作る側と食べる側、両者の思いに気づくことができました。そして「次はもっと上手に作りたい」と思ったはずですが、ここで「味が薄い」なんて言ったら、二度と料理をしない子になっていたかもしれません。

今回の夢育ポイントは、「結果でなく、それまでの過程を評価して伝えること」。まさに非認知能力の育成です。味だけ見れば「おいしくない料理」かもしれませんが、子どもががんばって作った料理だと分かっているならば、味なんて関係なく「おいしい料理」になるのです。主人公が「優しい嘘」というタイトルにしたところを見ると、親の思いが十分に伝わっていますね。（中山芳一）